

～旧約聖書を読んで感じること～ (64) ダビデの娘 タマル

ダビデの家は悲しい。多くの妻を持つという事は、性的放縦を野放しにすることであり、子どもたちへなんのメリットもありません。逆にそれが当たり前の世界で子どもたちは育つのです。預言者ナタンの指摘したとおりに、ダビデの家の中から、邪悪が起きていきました。

アヒノアムがダビデの初子として産んだアムノンと、ゲシュルの王の娘マアカの産んだ三男アブサロムが家庭の醜さに起因する事件を起こし、それから復讐劇が派生し、さらに父親への反逆へと、血で血を洗う争いが始まるのです。アムノンは長子ですから、ダビデが期待していた王子でした。

政略結婚によってダビデの妻になったマアカは息子アブサロム、娘タマルをもうけました。この二人は非常に美しい兄妹でした。ダビデの長男のアムノンはタマルに焦がれ、従兄弟のヨナダブの入れ知恵によって、病気を装い、タマル手ずから調理したお菓子を所望し、タマルを部屋に呼びました。タマルの信頼と親切を踏みにじり、凌辱します。

アムノンは彼女の言うことを聞こうとせず、力づくで辱め、彼女と床を共にした。そして、アムノンは激しい憎しみを彼女に覚えた。その憎しみは、彼女を愛したその愛よりも激しかった。アムノンは彼女に言った。「立て。出て行け。」(サム下 13:14)



アブサロムとタマル Alexandre Cabanel

処女と交わったものはその娘を妻としなければなりませんでしたが、腹違いとは言え、兄、妹の関係であり、しかも王女でもあります。欲望を遂げてしまうとアムノンはタマルを憎悪し、追い払ったのです。これを知ったアブサロムはタマルの身を案じて慰め、アムノンに対して、一切語らず、アムノンを憎悪し、秘かに復讐の折を待ちました。王族の血を引くアブサロムは誇りも高かったと思います。

兄アブサロムは彼女に言った。「兄アムノンがお前と一緒にいたのか。妹よ、今は何も言うな。彼はお前の兄だ。このことを心にかけてはいけない。」タマルは絶望して兄アブサロムの家に身を置いた。(サム下 13:20)

父ダビデは事の一部始終を聞き、激しく怒ったものの、アムノンに対し何の処罰もしませんでした。ダビデはこの件をうやむやのまま放置し、家長として、家の秩序を保てなかったのです。

素知らぬ顔のまま、アブサロムは 2 年後に計略を立て、アムノンを殺害しました。やはり許されることではなく、遠い北の母の実家へ逃げました。長子アムノンを殺され、アブサロムも去り、ダビデの聡明な妻・アビガイルの息子、次男のキルアブは、後継者問題に絡みませんから、ダビデは罰すべきアブサロムが戻ってくることを密かに望みます。ダビデは子どもを溺愛するばかりです。將軍ヨアブはダビデの決断力のなさに業を煮やし、3 年後に、アブサロムを呼び戻すため、一芝居仕組みます。

アブサロムはヨアブの取り成しによって、王宮に戻りましたが、ダビデに謁見することがなかなか許されませんでした。アブサロムは將軍ヨアブを脅迫し、なんとかダビデ王に会えるように頼みました。2 年後に、ダビデもヨアブの申し出を受けてアブサロムに会いました。兄殺しを咎めず、赦すとも言わず、ただ受け入れます。ダビデに会ったアブサロムは父の弱腰、家臣の言いなりになる状態を見抜き、父を「あの王の下では訴えを聞いてくれる者はいない」と揶揄し、**わたしがこの地の裁き人であれば、争い事や申し立てのある者を皆、正当に裁いてやれるのに。(サム下 15:4)**と罪を裁くことが出来ない父を軽蔑し、ダビデに反逆する陰謀を練り固めていくのです。

異母兄に辱められたタマルは、兄アブサロムのもとで屈辱と孤独に苦しみ、絶望の思いで日々を過ごしたのではないのでしょうか。さらにアブサロムの反逆で悲劇が大きくなって行きました。